『卍』――「腹の中」の闇――

大谷邦世

一　『卍』

『卍』はテクストが三つある作品である。まず、「改造」の掲載時の初出テクスト、すなわち昭和三年三月から休載を挟みながら昭和五年四月までかかり書かれたものが一つ、改造社から昭和六年四月に出版された初刊テクスト『卍』が一つ、新生社から昭和二十一年十二月に刊行され今日流布しているテクストが一つ、この三つである。それぞれ、伏字の有無などの違いがあり、それについては次章にて詳しく述べるとして、初出テクストが書かれた昭和三年頃から昭和五年頃までの間、同時期に谷崎という作家を煩悶させたのが、所謂小田原事件及び細君譲渡事件と呼ばれるものである。この事件での煩悶とその収束に向かって書かれた作品が『卍』であり、同時期に書かれた『蓼喰ふ蟲』である。『蓼喰ふ蟲』では円満に離婚しようとする夫婦とその周囲が描かれており、子供も妻も愛人もある種平穏に描かれている。それに比べると『卍』は同性愛の女性や生殖能力のない男が飛び道具的に登場する。両者は対極的に見えるが、同性愛にしろ生殖能力の欠如にしろ、夫婦であることや子供がいることへの否定であり、性の肯定である。すると『蓼喰ふ蟲』は夫婦であることや子供がいること、つまり「生活」が円満に崩壊し収束する物語であり、『卍』は「生活」が性によって瓦解し崩壊する物語と言える。本稿では、その『卍』について「光子妊娠」という仮説を探るため特に、①光子が堕胎狂言をして園子と復縁すること、②綿貫が生殖能力がないこと、③園子と光子が心中狂言を起こすこと、④柿内（孝太郎）が光子と薬によって生殖能力を剥奪されつつあること、の四つを注視しつつ論を進めたい。

二　削除されたものたち

現在流布している『卍』のもとになっているテクストは、初刊の刊行から十五年後に、新生社から出されたものであり、「伏字なし」「完本」として売り出されたが、その実、伏字を巧みに削除し、繋ぎ合わせたものである。[1]

伏字の削除は、新生社の要請ではなく、谷崎自身の判断であったようだ。実際に初出テクストと現行テクストを読み比べてみると、後者の方が伏字がない分、一つの文に注視してしまうことがなく、

さらりと読みやすく、一見整った文章に見える。谷崎が「伏字を生かす必要なし」[2]と判断したのは、読者が作品を読み、物語を追っていく中で、伏字によって躓かないようにする配慮であったのかもしれない。

しかし、その整えられた現行テクストが、初出テクストと読み比べた場合には物足りなさと一種のわかりにくさを発生させている。いくつか本文から例を挙げると、まず現行「その二十二」光子が綿貫の秘密を園子に暴露している場面で光子が綿貫に対して思っていることを現行テクストと初出テクストで示してみよう。

現行

もう〳〵そら止めてしまひたい思ひなさるのんですけど、そら不思議と、又二三日も立つうちに自分の方から跡追ひ廻すやうになつてしまふ。さうか云うて、それほど綿貫恋しいのんか云うたら、精神的にはえゝ思ふとこ一つもない、顔見るのんさいムカムカするやうな気イして、卑しい奴ツちや、見下げ果てた奴ツちや、云う風に、お腹の中では常時激しいに軽蔑してる。そいで毎日のやうに会うてることは会うてるけど、二人の気持ちシックリすることめつたになうて、いつでも喧嘩ばかりして、（「その二十二」）

初出

もうもうこんなこと止めてしまひたい思ひなさるんのんですけど、そら不思議と、又二三日も立つうちに情けないことも、、、、、、忘れて、自分の方から跡追ひ廻すやうになつてしまふ。さうか云うて、それほど綿貫恋ひしいのんか云つたら、精神的にはええ思ふとこ一つもない、ただ綿貫の、、、、、、、、、、、、、、、、、、に打ち克つこと出来へんのんで、それ考へたら顔見るのんさい胸がムカムカするやうな気イして、卑しい奴ツちや、見下げ果てた奴ツちや。ちやうど、、みたいなやツちや云う風に、お腹の中では常時激しいに軽蔑してる、その軽蔑してるもんに自分の運命握られてる思つたら、なお更腹立つて来ますさかい、しまひにはもう、彼奴は自分の恋人やなうて、、、、や、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、てるのんやと、そない思てなさつた。そいで毎日のやうに会うてることは会うてるけど、二人の気持ちシックリすることめつたになうて、いつでも喧嘩ばかりしてて、（「その二十四」）

右のように現行テクストは、初出テクストの約半分の文章に整えられている。この場面では、光子が綿貫をどのように思っているのかの表明であり、現行テクストでは光子が綿貫を軽蔑していて、「精神的にはええ思ふとこ一つもない」ということのみが表されているが、初出テクストではそんな風に思っている綿貫を何故光子が思い切ることが出来ないのか、その煩悶の理由を垣間見ることが出来る。

一見すると、確かに伏字はそれが単なる欠落のようにも見えないこともない。けれども、伏字があることによって、読者は伏字の中身を想像しようとし、伏字という隠された文に一種の含蓄を見るこ

とが出来た。初刊で伏字を残したのは、谷崎自身その一種の含蓄を残すためで、その後、削除されたのは新生社から発刊された頃の時勢や谷崎の文章への感覚の変化もあったのかもしれない。伏字が単なる文章の穴となるか、文章の深淵となるかは、読者によるところがあるとは思えど、伏字が削除されたことで深淵と成りうるものまで削除されたしまったこととすれば、それは残念なことだろう。

＊

伏字以外に削除されたものたちについても言及しておきたい。何度も言うようだが、現行テクストと初刊テクストと初出テクストはそれぞれに違う。初刊テクストにおいては細かい言い回しや方言の改変は膨大になされているが、伏字はなるべく採用している。しかし、現行テクストからも初刊テクストからも削除されたものたちの存在がある。

一つには、園子の「子供」の存在。[3]「園子」という人物の造型として、あるいは光子との同性愛の障壁と成りうる園子の「子供」は物語の進行上妨げになると判断しての削除であろう。園子の「子供」は、柿内（孝太郎）という夫と園子の夫婦としての営みを示す。その不在は、結婚当初から性的に合うことがなかったことの象徴にもなる。だからこそ、園子は夫以外の「あの人」との交際をせざるを得なかった訳である。

また、「あの人」については、その存在自体について現行からも初刊からも削除されてはいないが、その造型については初刊以降大幅に削除されている。以下は「あの人」から園子への手紙について語られている場面である。

初出

先生はあの時、私がお目にかけましたあの人のラヴレターを御覧になつて、（中略）此れで見ると、此の男の恋愛には精神的なところが全くない、肉感的な、それもまるで娼婦にでも送るやうな野卑な文句が中学生程度のセンチメンタリズムを入れて並べてあるばかりだと、さう仰ついましたのね。それに先生は、僕が此の男だつたら、こんなイヤらしい桃色の封筒へわざと紫インキを使つて女みたいな字を書いたり、女名前の偽名をしたりはしないだらう。（中略）女に駆け落ちを迫るほど真剣に恋ひしてゐるなら、僕なら正直に恋人の夫に情を打ち明けて、此方へその人を譲つて貰ふ。（「その一」）

「あの人」は綿貫に似たような面を持っている。特に似ている特性については右に傍線を引いた。また、「あの人」は園子と「殊に肉体上の関係がなかつた」という点でも、綿貫が「プラトニツク・ラヴ」と称して、何人もの処女を弄び、真剣な交際、あるいは結婚が見えてきた時にふらりと居なくなるやり口に通づるものがある。谷崎には「あの人」とやらが実は綿貫であったということも、「その一」を掲載したときには腹案としてあったのかもしれない。その場合は、おそらく物語の構造上、園子と綿貫が敵対することは免れえなかったために、「あの人」についての造型を削除せねばならなかったのだろう。いずれにせよ、園子自身が同性愛的な下地として、

「殊に肉体上の関係がなかつた」「あの人」という元交際相手がいたことだけが残された。

もう一つ、削除された存在を挙げておこう。光子の「弟」についてである。「弟」の存在については「信雄」という名前のみが初出にて示されており、それ以外の情報は初刊以降の文章にも出てこない。おそらくは「お梅」などのように物語を円滑に進めるために、光子側に男性の理解者あるいは味方をつけておいて、物語が行き詰った時に利用するような手筈もあったのかもしれないが、初出を書き終わった時に、その存在が不要となったために、初刊以降ではその存在自体を消したのだろうと思われる。(4)

＊

伏字、削除された登場人物、それ以外にしばしば言及される(5)ように、初出テクスト「その十二」と「その十三」については大幅な削除がある。初出「その十二」と「その十三」については、初出「その十四」にて、「(作者註。――前号及び前前号の二回分は作者の聞き違ひのために事実を誤つたところが多い。」として、訂正文――これは初刊以降消えているもの――を添えている。それによると、「柿内未亡人は夫を籠絡したのではなく、真に心から己れの罪を悔い、一旦は全く光子を思ひ切つて貞淑な妻になることを誓」い、「夫婦喧嘩はしまひにほんたうの和解に達した」とあり、初刊以降はこの「作者註」の主旨に沿い、初出「その十二」と「その十三」が合併した形で、現行テクストの「その十三」となっている。初出「その十二」では園子が柿内に園子が光子と家出するのではないかと邪推したことや光子と園子の手紙を見たことを謝らせたり、酒を注ぐように求めたり、現行「その十三」の夫婦の和解の場面と比べると、正反対と言えるほどに違いがある。もし初出「その十二」「その十三」のまま、物語が続いていったとすると、柿内はそれまでの夫婦の関わりを入れ替えて、わがままな園子の精神的な奴隷となっていた可能性もあるのである。

しかし、それでは、「卍」の四つ巴が完成しない。柿内はいつまでも蚊帳の外となってしまう。『卍』は柿内と光子が結ばれるまでの物語が主体であるとする論文(6)もあるようにこの大幅な変更・削除は四つ巴の完成に向かって動いている。それを完成させるには柿内に光子の魅力を分からせる手筈、それに至るまでの物語が必要になる。そのためには、柿内は園子の奴隷になってしまってはいけない、ゆえにこの場面には夫婦の「和解」が必要であり、園子の改心が必要であったのである。

＊

また、削除されたものの中には光子の歌とされるものがある。伏字に囲まれていることから全面的に削除となった可能性は高いものの、この歌自体には伏字も無い。

初出

夫云うたら凡ての運命に従順になつてしもてて、自分が第二の綿貫にさされること拒まんばつかりか、却つてそれ幸福に感じ

てるらしいて、薬飲むのんも最初はイヤがりましてんけど、しまいひには進んで飲まされること願ふやうになつて来て、「、、、、視詰めながら次第に知覚失うて行く瞬間、、に、、、や」云ふますねん。さうさう、たしかその頃の光子さんの歌に、

知るや君地獄の國の園にこそ
神もうらやむ木の実ありとは
楽園の甘き木の実を何かせん
世の常ならぬ戀ひをする身に

――云ふのんあつて、その歌の意味尋ンねましたら、「綿貫のやうなもん相手にしたかて『、、、、、、、、』とは云はれん、、ゞ、、、綿貫みたいにさしてしもてこそ、、、、、や」云ひなさいますねん。けどそないなこと何処まで本気で云うてなさつたのんか（中略）光子さんのお腹の中は『、、、、、、、、』に飽き飽きしてなさるねん（「その三十五」）

この引用の前には、柿内が「第二の綿貫」にされるという文脈があり、伏字になっている部分もおそらく柿内が薬漬けにされることで「第二の綿貫」「みたいにさしてし」まうことが書かれている。つまり、柿内の「変化」がこの歌の中にも表れていると仮定できるが、光子の歌の意味を考えてみると、柿内の「変化」に限ったことではないように考えられる。

その歌について見ていくと、「地獄の國の園」というのが光子、園子、柿内、綿貫の四角関係の世界あるいは薬漬けにされた柿内と園子、それを強制させている光子の三人の世界を意味しているとして、すると「神もうらやむ木の実」とは何だろうか。「楽園の甘き木の実」とは何であろうか。「神」や「楽園」、「木の実」という単語から、旧約聖書を連想できる。「神」＝「エホバ」、「楽園」＝「エデン」、「楽園の甘き木の実」＝「知恵の木の実」とすると、「神がうらやむ」というのは神の所有物でない、あるいは神が作りだしたものではないもの、という意味の「木の実」ということだろう。「地獄の國の園」の「木の実」がおそらく「神のうらやむ」＝神の所有ではない「神のうらやむ木の実」であり、文脈から考えると「神のうらやむ木の実」は「神の所有物でない、あるいは神が作り出したもの」でないとすると人工的なもの、と考えられ、「薬」などが当てはまる。薬漬けにされている柿内の描写から園子がこの光子の歌を「さうさう、」と思い出しているため、人工的な「薬」が「神のうらやむ木の実」と解釈することは可能である。この点については後にもう一度触れたい。

削除されたものたちは他にも存在するが、ここで重要なのは伏字や文章削除によって削ぎ落とされたものがあるということである。園子の「子供」や光子の「弟」などはその存在が物語の進行上、不必要であったこと、また、削除された文章や歌についても必然性があることは伺える。次章ではそのさらなる深層を探っていきたい。

三　嘘

先にも、初出「その十二」「その十三」では、園子が夫を「籠絡

したのではなく」、「和解」したことによって、柿内が園子の奴隷にされるのではなく、光子の奴隷にされるその道筋が出来た事を述べたが、この削除による転換はもう一つの意味を孕んでいる。

現行テクストにおいて、綿貫の計略に落とされた園子が柿内との和解に至らなければ、つまり初出「その十二」「その十三」のように園子が光子との関係を続けようとしていたならば、光子が園子との復縁を迫るために堕胎狂言を起こすこともなかったのだ。この狂言がなければ、その後柿内を欺すために色々の嘘を吐かずに済んだのだが、園子は自らの欲の遂行のため嘘を吐き続け、そこに幾重にも思惑が重ねられていく。堕胎狂言とその後の物語構造について、ここで少し言及しておきたい。

堕胎狂言の後、光子と園子はその関係を復縁させる。そこで彼女たちの障壁となってしまったのが、柿内、つまり園子の夫である。夫を巧妙に欺くため、お梅の案で光子が妊娠したことにし、宿屋井筒を光子のお父さんの「てかけはん」の家として嘘をつき、結婚前に妊娠してしまった光子をそこで匿っている事にした。そして、柿内には光子が外にも出られずに寂しがっている、避妊法などの書かれた外国の本を貸してしまった園子は関わり合いになってしまった以上会いに行かなければ可哀想である、という体裁を繕い、園子は光子との逢瀬を重ねていくのである。逢瀬を重ねる最中にも、綿貫と光子の関係を気にしていた園子だったが、ある日綿貫に声をかけられ、光子が綿貫の子供を宿してる事を知らされる。無理やり誓約文を書かされた翌日、光子から綿貫が「百パーセント安全なステツキ・ボーイ」である事が暴露される。その後、誓約文を綿貫から受け取った柿内が訪ねてくると、光子はお腹の中に子供がいるように見せかけるため、着物に綿を詰めねばならない事になる。このように、堕胎狂言以後の物語だけでも、

①堕胎狂言（光子案）
←
②妊娠偽装（お梅案）
←
③光子妊娠（綿貫の嘘）
←
④妊娠不可能（綿貫が不能のため）
←
⑤妊娠狂言（腹に詰め物をする）

というように、光子が妊娠したかどうかについて、その黒白が次々に裏返される。①堕胎狂言は光子が園子に会うために、②妊娠偽装は園子が光子に会うために、③光子妊娠は綿貫が自分の思惑のために、⑤妊娠狂言は妊娠偽装が柿内に明るみとならぬように、一つ一つの嘘が嘘を呼び、嘘が重なっていく。それぞれの思惑と欲望のために、事実が何度も裏返される。こうした一つ一つの嘘によって、ある事象がオセロの裏表のようにその黒白がすぐに〈反転する〉という物語の構造が『卍』にはある。語り手である園子の特性――見聞きしたことに振り回されがちな「お人好し」であるため聞いた話を真に受けてしまうこと、そしてそれを語ってしまう事も

この〈反転する〉事の要因の一部ではあるが、登場人物四人が自分の欲望のために様々な嘘をつく、その一つ一つが語りの表裏を形成しているのである。登場人物一人一人が腹に一物抱えているために、読者に語りとして表立って現れてくるものと、もう一つ裏のものが存在するのだ。

その「反転する」事は、例えばこんな場面にも現れている。物語の序盤、光子と園子の「同性愛」の噂が校長先生から広められていく。これは後に光子から自分がその噂の発端である事が知れるが、つまりそのあくまで同性愛の「噂」という嘘であったものが、園子に光子への「パッション」が生まれた事で「本当」になってしまうのである。

また、「百パーセント安全なステッキ・ボーイ」という性的不能の人間であったということにも関わらず、綿貫が園子の前では一人前の男のように振舞っていたことや、その反対に、柿内は性的欠陥が無かったにも関わらず、光子の薬によって性的不能のようにさせられている。綿貫と柿内自体が対の関係となっている。

他にも、物語の終盤では、光子と園子が関係を続けるために心中狂言する場面があるが、この場面には対として本当に心中してしまうという反転がある。

これらをまとめると、

同性愛の噂→同性愛

性的不能→性的有能と嘯く（綿貫）

性的有能→性的不能にされる（柿内）

心中狂言→心中

のようになる。

『卍』では真実が明かされる時、つまり「反転する」時、その対となるものが用意されているのである。

ところが、先に挙げた光子の妊娠についての五点のうち、妊娠狂言についてだけ、その対となるものがない。ここまでいくつかの例を挙げたものについても、その対となるものが存在するにも関わらず、伏線を回収するように用意されているはずの、伏線の答えとしての対が妊娠狂言については用意されていないのである。物語の構造上から考えたとき、何故、光子の妊娠狂言については対が見つからないのか、その問題を考えるときに、筆者が引き出したいのは「光子妊娠」なのである。光子が物語後半において妊娠していたならば、妊娠狂言の対となるものが台頭してくるわけである。そもそも、これだけ堕胎や妊娠を取り扱ったであるのにも関わらず作品において、本当の妊娠というものが存在しないこと自体が疑わしい。

物語の構造上、光子の妊娠はありえるのではないか。

光子が「自分の崇拝者を一人でも仰山寄せ着けときたい性分」から園子の夫、孝太郎とまで関係を持つことは本文からも分かることであるが、孝太郎が光子に心を絡め取られる過程の場面は園子の夢の中として朧げにしか描かれない。勿論、園子にとっては夫である孝太郎と光子の睦み合いは語りたくないことである。だからこそ、夢の中で見たことを「その外にもまだ忘れることの出来ん場面」を覚えていても、詳細には語られないのであるし、園子の中でも夢で

あったと思いたい部分があるのだろう。少し長くなるが、この部分を引用してみよう。

初出

……それがあのう……此いだけやつたらみんな自分の心の迷ひで根エも葉アもない幻見たんや、そんな事実あろう筈ないと打ち消してしまひますねんけど、その外にもまだ忘れることの出来ん場面覚えてますし、……それも初めは阿呆らしい夢や思てましたのんが、薬さめて意識ハツキリして来るにつれて、外の夢だんだん消えてしまひますのんに、その場面だけ却つて頭い焼き付いてて、疑う余地ないようになつて来ましてん。（中略）光子さんが寝惚けたように「姉ちゃん」云ひながら私の方い寄つて来うとしなさるのんで、眼エ覚ましたらいかん思て、間い這入つて光子さんの体抱き上げるようにして引き離して、枕外しなさったのんを直したげたり、上布団掛けたげたり、……そんな風にして寝てはるとばつかり思い込んで油断してましたさかい、知らず識らず、、、、、、、、、、、、、、、、気イ付いた時にはもうどないしても、、、こと出来んようにしられてた。何せ夫ちゆうたらそないな事にかけたら経験のない、子供みたいな人ですよつて、その時のこと思ひ出すたんびに「光子さんちふ、、、や」云ふのんも無理はないのんで、私は夫の話の方がほんまに違いない思いますねん。（「その三十二」）

引用の前半は園子の夢の中で忘れられない場面があったと園子自身が語っているもので、引用の後半は後々孝太郎から聞いた事情を代弁している。この「忘れることの出来ん場面」というのが、何を指しているのかは園子の口からは直接語られないが、「それがあのう、」とかなり言い辛そうに切り出して語っていることからも、園子にとって都合の悪い、かつ、忘れがたい場面であることが言える。これだけあけすけに語ってきた園子が言い辛いこととは光子と夫の性交場面であることは本文からも察せられることである。そもそも、寝ているすぐ隣で及ばれる行為に園子が全く気づかないというのもたとえ睡眠薬が異様に効いてしまっていたとしても、ありえない話である。「その三十一」では「なんせ光子さんは始めてほんまの男性ちゅうもん知んなさつた」と園子が語っているように、光子と孝太郎の性行為がやはり仄めかされている。そうなると、果たして狂言心中として選んだ急場に色々の準備、つまり避妊が確実にされたかどうかは極めてあやしい。光子がこれまで付き合っていた綿貫はその名の通り、完全に安全な「ステツキボーイ」であったわけで、また、孝太郎も初めて「パツション」を持って女性に接したのだ。場所とその場の「はずみ」というのが、どれほど二人の精神に影響したかはわからないが、何かの失策もあり得ない話ではない。

そもそも、柿内夫妻を薬漬けにせねばならない光子の心境というのが狂気じみている。園子は「綿貫の影響」で普通の熱情の注がれ方では光子が満足出来なくなっていると語っているが、果たしてそれだけで夫妻を瀕死の体にする必要があるだろうか。光子が自分の魅力を信じているなら薬漬けにしなくても、夫妻の熱情が失われることなど無いと自信を持てる筈であるから、嫉妬や邪推だけが問題

ではない。普通の熱情では満足しないというのも、光子の諧謔性は現行「その三十二」に至ってからより強く、異常性を帯びてくる。というのも、光子自身何らかの失策があったからではないだろうか。つまりそれが妊娠だったのではないだろうか。

「何ぼでもおいしいもん喰べて、つやつやしい血色してなさる（初出「その三十五」）」、「光ちゃん一人丈夫さうにぴんぴんしてる（初出「その三十六」）」光子の様子を深読みせずには居られない。光子が柿内夫妻を薬漬けにして、昼夜頭をぼんやりとさせていたのは、自分の体の変化が感じ取られないようにするためだったのではないか。そしてその変化がいよいよ隠しきれないようになってきた時、光子自身がお梅に指示を出し、新聞にすべて暴露させ、心中を誘ったという可能性も考えられる。でなければ、何故光子は最後に園子へ同性愛の証拠となる手紙の束を託したのだろうか、「死の」と言って何故自ら、心中の手筈を整えたのだろうか、心中に至るまでに不可解な点が多いのである。

もし、子供が出来たことが柿内夫妻に知られれば、光子を強者とした園子と孝太郎の三角関係は続いていかないのである。この三角関係は光子が絶対強者であり、園子と孝太郎が互いに対等に邪推しあい、光子を奪いあうことで成立している。しかし、子供が出来たとなると、光子と孝太郎のつながりが一歩秀でることになる。「不自然の愛より自然の愛尊い」と光子に言われたら、と園子が不安を抱えているように、子供が出来ることは園子にとってまさに脅威であり、自らの熱情の敗北を意味する。同時に孝太郎が優位になり、光子が絶対的強者で夫妻が互いに光子を巡って争うという状況から脱してしまうのだ。光子はそれを恐れた。「自分の崇拝者を一人でも仰山寄せ着けときたい性分」の光子は自分の失策で彼らが離れていくことを最も恐れた。そう考えると、柿内夫妻を薬漬けにした意味が見えてくる。

また、光子は孝太郎と関係を持ったあと、園子と孝太郎を同じ寝室に寝かせ、自分は家に帰ってしまう。それによって、一応夫婦関係である柿内夫妻に嫉妬しているような場面があるが、三人で同棲すれば、そんな風に気を揉まなくてもよいのではないだろうか。もし、光子が妊娠しているとしたら、悪阻などの妊娠の予兆が現れてきたときに、自宅の方が柿内夫妻に自分の妊娠を悟られないためには都合が良い。だから三人で同棲することが出来なかったのではないだろうか。

自分の崇拝者をより多く従えたい性質のある光子にとって、崇拝者たちは同等で競い合って、嫉妬し合って居てくれた方が扱いやすいはずである。しかし、光子が妊娠しているとしたら、子供という繋がりの存在が孝太郎を園子よりも上位にさせ、崇拝者たちを同等とすることが出来なくなる。子供の存在は邪魔なのである。かと言って堕胎という話になると、柿内夫妻に勘付かれる可能性がある。そのために、園子と孝太郎を薬漬けにする必要があったのである。

光子が最後に死を選び、柿内ともに死んでしまうのは、彼らの生殖の関係と子供という繋がりを表しているのではないだろうか。

四　種

次に光子の妊娠を考える上で綿貫の性質と柿内の性質を比較する。

まず綿貫については、綿貫が光子以前に引っ掛けた女性には接吻や体への接触はあったようだが「プラトニツク・ラヴ」であったと本文には書かれており、それを真実とすると、光子以前の女性にはせいぜい愛撫までが限度であり、「玄人」に教わったというテクニックを駆使していたとしても、それらの接触は結婚を仄めかすと綿貫が離れていくという程度の女性に対する行為であった可能性が高い。逆説的に言うならば、綿貫からすると、光子という器量良しの名家育ちのお嬢様を是非とも自身の「秘密」を知らせぬまま、できれば結婚まで持って行きたかったと考えることも出来る。ゆえに、光子に対しては単なる愛撫以上の接触があったとして考えることが妥当である。光子からすると、綿貫と出会う以前は処女であった故の無知で、綿貫の行為が正常のものであるか、異常のものであるかは察しがつかないものと思われるが、光子が綿貫の秘密を知った時にはすでに結婚が免れえぬ状況であったことは本文の光子の言動から察せられる。つまり、光子が真実を知った時点ですでに光子は実質的に処女ではなくなっており、他の男性に嫁ぐことが困難であったはずなのである。ということは、その時点で性交に準ずる行為がなされていたと考えるべきである。

しかし、その性交が通常の行為として行われたとするのは考えにくい。綿貫がいくら種なしと揶揄されていようと、おたふく風邪による高熱で睾丸炎を併発し、無精子症となったならば、通常の行為としては問題なく、ただ妊娠が出来にくくなるという状況下での行為となるはずであり、単に無精子症であれば、勃起不全なども起こらないことが多く、自覚症状のない人も多い。小さい頃から親に嫁を取らせないことや幼少期の睾丸炎について綿貫が聞かされていたとしても、目に見える自覚症状がなければ、綿貫が「プラトニツク・ラヴ」などと嘯いたり、必要以上に自身に劣等感を持ち、自己肯定をすることもないはずである。「プラトニツク」と言うからには、通常の性行為に至ったときに、目に見えて、男性として劣等感を感じるようなことがある、だからこそその「プラトニツク・ラヴ」と考えるのが自然である。だからこそ、光子が綿貫を捨てて、柿内との行為に至った理由として、園子が言っているように、

初出

光子さんを動かした何より強い力は、、、、ちふもんに対する好奇心、――今まで綿貫みたいなもん相手にしてなさつて、、、な方い導かれてゐなさいましたさかい、その好奇心普通の、、より一層盛んで、それが案外有力な原因やつたか分れしません（「その三十三」）

「光子さんは始めてほんまの男性ちふもんを知んなさつた（現行「その三十一」）」などがあり、引用の初出テクストは現行テクストでは削除されているが、この文章の伏字を透かして見ると、「綿貫みたいな」異常「な方い導かれ」るのではなく、「、、、、ちふもんに対する好奇心」があったということが分かる。「、、、、ちふ

もん」というのが「綿貫みたいな」ものと対極のものであることは容易に察せられる。つまり、綿貫は「ほんまの男性」ではなく、「、、、、ちふもん」でもないということで、「ほんまの男性」とは決定的に性行為として違いがあるということである。

逆に、光子と柿内の行為は「ほんまの男性」であり、生殖能力もあり、光子の「、、、、ちふもんに対する好奇心」を満足させる性行為であったのだろう。

しかし、先にも述べたように、光子が好奇心ゆえに求めたその「普通の性行為」はその後光子自身の手によって、柿内の体を薬に衰弱させることによって行為自体が無くなっていく。園子と光子の心中狂言以後、光子と柿内の行為は描かれることがない。八月頃の心中狂言から十月二十八日の心中までは約三ヶ月程度あるが、心中狂言以後、光子、園子、柿内は互いに監視するような間柄になり、園子と柿内が光子によって薬漬けとされるまで、光子と柿内の二人だけの逢瀬はあまり無かったと考えられ、すると、この二人の行為は確実ではないが心中狂言時の一回だけということになる。後が続かなかったのは、監視の目があったからかもしれないが、薬漬けにして性行為を封じる必要はない。行為を封じる必要があったのは、光子が柿内に裸体を見せられないからであり、体への接触によって、光子の妊娠の発覚を防いだのである。

その唯一かもしれない光子と柿内の性行為中、その場のいきおいと、準備不足があったとしたら、妊娠は可能性として有り得る。光子が最初から柿内と関係しようと画策していて、その準備をしていたとしても、「百パーセント安全なステッキ・ボーイ」とは訳が違うのであって、綿貫以前には処女であった光子が果たして避妊のための十分な準備ができたかどうかということは、頗るあやしいものである。とはいえ、状況的には光子の妊娠が「有り得る」と言えるというだけである。次章では、その「準備」について重要な人物である女中「お梅」を取り上げる。

五　影

常に光子の傍らにその身を置き、園子や綿貫とも面会できるお梅は、彼ら三人の相談役になっていた可能性が高い。光子、園子、綿貫あるいは孝太郎の三角（四角）関係は園子が冒頭に「先生」に語っている通り、「こんがらがつて」おり、そういう複雑な関係を持った男女が誰かしらに自分の話を聞いてほしいと思うのは当然である。そうした時に、光子はもちろん、園子とも綿貫とも面識があり、それぞれの事情もよくわかっているお梅が相談役として最も適しているわけである。女中という立場上、基本的に光子の味方ではあるだろうが、光子の恋人たる園子や綿貫に対しても、立場上、相談を受けた場合にはひたすら聞き手に回るしかない。よって、お梅は三角（四角）関係の真ん中で、彼らが各々どういう心情であったのかを知り得る立場にあると言える。

それは光子から「大阪の南」へ揃いの着物を届けてほしいという急な電話を受け取り、園子がお梅を車に乗せていく場面からもよく分かる。ここではなかなか車に乗らないお梅を「何や腑に落ちんら

しゆうぐずぐずしてるのんを無理に乗せて走らし」とあり、また園子がお梅なら訳を知っているだろうと詰め寄っても、「初めのうちは困つたような顔して、言葉に詰まつて」いるお梅が描かれている。これはあとあと園子が「お梅どんかつてやつぱり光子さんや綿貫とぐるになつてたんに違いない」と語っている通り、お梅は光子と綿貫の関係をすでに知っていたのだが、お梅もまさか園子本人を井筒に向かわせる綿貫の策略には驚いたからこそ、なかなか車に乗ろうとしなかったのだろうと推測される。

また、この場面では「心から同情したよう」なお梅に対して、「そんなお梅どんみたいなもん相手にしたかつてしようむないのんですけど」、「何でもかんでも云う気イになつて」、感情をさらけ出す園子が描かれており、何かあるごとに園子が感情の捌け口を求めて、お梅に語る様子は容易に想像できる。お梅が光子や綿貫とぐるだと分かっても、光子の狂言妊娠のあと光子と復縁した園子がお梅との信頼関係も回復させたことは「その十七」で「お梅どんが考えつきましてん」と、お梅が考えた策略を採用する姿からも分かる。お梅が暇を出されるまで、おそらく園子は光子と何かあるごとにお梅へ語っていたのだろうと考えられる。

さらに、お梅は光子と園子が狂言心中したときにも重要な役割を果たしている。狂言心中の準備や根回しは園子やお梅が実行している。お梅がいなければ、孝太郎が狂言心中の場に来ることもできず、孝太郎をこの「こんがらがつ」た恋愛に巻き込むことはできなかっただろう。その意味で、お梅は影の立役者である。

しかも、園子が睡眠薬の夢の中に居る間も、起きているお梅は先に睡眠薬から覚めた光子と合流した孝太郎のやりとりを目撃しているはずである。園子の夢の中には「私と光子さん中に挟んで両端に夫とお梅どん寝てる」とあり、園子の夢はすべてが夢ではないことがあとあとの孝太郎の証言からも分かるように、こうした状況はあり得るのである。同じ一間に寝るくらい近い距離にあったお梅が何も分かっていない訳がない。以上のことから、お梅は彼らの三角（四角）関係を常に身近にあって見ていた立場であるのだ。

園子の〈語り〉の裏でお梅が〈語らない〉からこそ、真実が見えにくいという構造を『卍』は持っている。お梅は光子の女中であるから、基本的には光子の味方であり、園子に光子の全てを語ることはない。ゆえにお梅という全知的立場が不在のまま物語が進む。それによって物語は「その二十二」の光子の語りの代弁まで真相が語られることがない。語らない、「影」の立役者であるお梅の暗躍が物語の語りの裏にあるのである。

さて、お梅は「影の立役者」であると同時に、常に光子の傍らに身を置く立場にある。光子は「どうで自分の崇拝者一人でも仰山寄せ着けときたい性分ですさかい」と園子は語る。この「性分」は光子に恋する園子の証言ではあるが、確かに光子にはそういう部分がある。園子自身も孝太郎も光子のその「性分」のせいで従えさせられたと言っても過言ではない。

では、「自分の崇拝者一人でも仰山」というのには、果たしてお

梅は入らないのだろうか。そんな「性分」を持つ光子の傍にほとんど一緒にいるはずのお梅にそれは適用されないのだろうか。光子自身、女中という立場のお梅を、眼中に入れていなかった可能性も十分にある。しかし、本当にそういう「性分」が光子に宿っているなら、光子がお梅に働きかけさえすれば、お梅も光子の魅力に取り憑かれてもおかしくはないのである。現にここまで示してきたように、お梅は主人の光子のために暗躍しているのである。狂言心中の手伝いなど、本来女中がそこまで手伝うべきでないことは明白であり、明らかに女中の仕事の域を超えている。事が露呈すれば、お梅がすべてを黙っていたことで光子の両親から暇を出されてもおかしくないとわかるくらい、光子に荷担している。光子とお梅が主従関係だからだと言えばそれまでであるが、果たしてそれだけで片付く問題なのだろうか。お梅が光子に恋していなかったと言い切れるだろうか。お梅の心情は「語らない」ためにわからず終いであるが、お梅の心はいつも光子の味方であることは言い切れる。

では、そんなお梅が何故、新聞にすべてを暴露し、光子を裏切るようなことをしたのか。新聞にすべて載ってしまった記事から察するに綿貫のリークだけでは事が済まない点があり、そこには明らかにお梅が関与していることは本文にも書かれている通りだ。柿内夫妻と関係を持った光子が夫妻を薬漬けにして虜にしている事は異常ではあるが、光子の思惑通りなはずである。そんな時に彼ら三人を追い込むようにして、新聞にすべての事が暴露されるのは、お梅の裏切りではないのか。暇を出され、お梅が恨んでいたとしても、お梅は本当に彼らを、光子を裏切ったのだろうか。

お梅は光子に指示を出されて公表したのではないだろうか。そうすると、ここまで考察してきたお梅の行動と一致するのである。お梅は光子を裏切ったのではなく、指示されて実行したのだとしたら、お梅の気持ちは狂言心中を画策したときとさほど変わりないだろう。では、光子は何故、お梅にすべてを公表させたのだろうか。それは、何度も言うように光子が妊娠していたことを柿内夫妻に知られぬためであり、体の変化が如実にならないうち早いうちに、心中への歩を進める必要があったからである。

六　光

ここまでお梅や綿貫、柿内の状況を見てきたが、最後に光子に焦点を当てたい。光子と光子の妊娠について問題なのは、何度も言うようにその避妊の準備の有無である。そしてその「準備」は光子がどれだけ柿内との性行為に積極的であったのか、最初から画策していたものだったのか、が鍵である。

そもそも、光子と柿内の性行為は光子にとって、どれだけ自覚的なものだったのだろうか。睡眠薬の効果から光子も半分は不覚のまま、その場の「はずみ」で二人が性行為に及んでいた場合もあり得るが、先の引用でもあったように光子は「、、、、ちふもんに対する好奇心（その三十三）」があり、柿内も「知らず識らず（その三十二）」どうすることも出来ないように光子に誘われたことが園子によって代弁されており、「光子さんちふ、、、や（その三十二）」

という証言もしている。この伏字は文脈で考えると「あくまや」と解釈でき、あるいは「妖婦」などの逃れえぬ魅力を携えた化身という旨の単語であることが推測できる。いずれにしろ、光子が柿内との性行為に対し、自発的であり、自覚的なことには変わりない。その行為が光子の不覚ではなく、策略であるならば、それ相応の準備も出来たのではないかとも考えられる。

しかし、そうすると別の問題が発生する。そもそも狂言心中の準備はおおよそお梅がしていたであろうことは察しがつくことである。そこに光子自身が避妊具などの準備をしようと画策したとて、園子から借りていた「外国の本」なるものは中川の奥様に本当に貸してしまっていて、手元にはない。それを取り寄せる時間も、狂言心中の策略が生まれてから実行に移るまでに数日しかない中でその本をどこかから仕入れ、外国語を読む時間が光子自身にあったかと言ったら、難しいことだろう。光子が園子から避妊の方法を聞いていた可能性もないこともないが、しっかりとその方法を光子が覚えているかと言うと、「外国の本」とやらが話題に上がるのは「その十二」で、光子が園子から避妊について話を聞いていたとしたら、「その十二」より前であり、その頃、光子は避妊ということとは無縁の、綿貫と付き合っていたわけである。つまり、光子が園子から避妊についての話を聞いていたとしても、それをしっかりと覚えているかどうかは甚だ疑問なのである。また仮に、避妊具あるいは薬などの用意をお梅に言いつけたとて、それらのものは堕胎や産児調節について騒がれていた時勢を考えると、容易に手に入れられるものではない。

すなわち、避妊をするという準備は絶対的に足りていないのである。故に、あとは光子自身の受精率の問題と柿内の手腕にかかっていて、後者については園子からも「子供のやうな」と揶揄される夫であることから、こういう行為や恋愛について疎い柿内がどれだけその「パッション」を抑えられたかという問題であるが、初めて「パッション」と知ったとまで言う柿内には期待できない問題である。

さらにつけ加えると、柿内の証言によると、狂言心中から二日目の昼頃、光子と行為をしてしまったとき、お梅は光子の実家に戻っていていなかったのである。光子はその時機を狙ったのだろうが、お梅がいないとなると益々その「準備」はあやしいものである。

そうなると、光子の妊娠の如何は受精率の問題になってしまうのである。百パーセント妊娠するということは言えないが、百パーセント妊娠しないということも言い切れないのである。

＊

最後に、妊娠の可能性が光子にとってどういう心情を齎すかを探りたい。それを探るために、何故光子は死を選んだだろうかと言う問題を考えてみる。園子が初出「その三十五」で「あの時第一に「死の」云ひ出しなさつて最後の手筈きめなさつたんのは光子さんでしてん」と語っているように、心中を決めたのは光子自身なのである。どれだけ柿内夫妻を薬漬けにしようと、同性愛に陥っていよ

うと、光子は良家のお嬢様であり、器量もずば抜けている。事件が新聞に暴露され、家族にことを知られても、時間が経って騒動が収まれば、それなりの生活に戻ることもできたのではないだろうか。確かに、世間体に背き、それを暴露されたとあっては、実家から追い出されることも十分有り得るが、光子が自らの魅力を信じる事が出来ているなら、その器量だけを武器にして生きていくことも出来たはずである。園子が不安に思っているように「もう直き二人幽霊のやうに細うなつて死んでしまふのん待つてなさつて」「ええ婿さん捜そ思つてなさる（初出「その三十五」）」ということも十分出来たはずである。

しかし、光子は死を選んだ。一つには、光子が死ぬことによって、生き残って語る園子と埋まらない距離を置くことで光子をより美化させ、神格化させようとしたこともあるかもしれない。光子という登場人物としてはどうだろうか。世間体や家族に顔向け出来ない状況から死を選んだということは勿論あり得る。しかし、それらを気にしているのなら、光子が二人の同性愛の秘密が綿々と書かれた手紙の束を何故園子にすべて託したのか。家族に秘密を知られたくないと思うのならば、「書き置きの代りに此の戀ひの記録遺しとこ（初出「その三十六」）」と言うだろうか。「戀ひの記録」という手紙がまさしくその証拠になってしまうことを考えると燃やしておくべきである。そうしなかったのは、園子への、あるいは園子からの、同性愛をそのままに遺して死にたかったのだ。柿内や綿貫とも関係した光子が、何よりも真に恐れたのは、新聞に暴露されることよりも、家族に秘密を知られることよりも、死ぬことよりも、園子との同性愛が崩れることだったのではないだろうか。光子が最後の心中を準備したとき、その薬の量を調節して自分だけ生き残ることも可能だったはずである。しかし、生き残ったのは園子である。園子との愛が光子にとって一番かえがたいものであったからこそ、光子は園子を生かしたのではないだろうか。手紙の束を「預けた」のはその記録を園子が文章に残してくれることを予見してのことだったのではないだろうか。もし、光子の心情が真に園子への同性愛に傾いているとしたら、光子が妊娠したということが園子へ知られることが何よりも一番恐ろしいのである。

先に触れた光子の歌も、園子と胎児との間で、傾き、揺れる思いを読んだものと考えられるのではないだろうか。

知るや君地獄の國の園にこそ
　神もうらやむ木の実（このみ）ありとは
楽園の甘き木の実（このみ）を何かせん
　世の常ならぬ戀ひをする身に（「その三十五」）

「木の実」という表現を「此の身」と読むことも可能である。「地獄の國の園」という言葉が、「園」＝「園子」であるなら、「園」に「木の実」＝「此の身」があるとも解釈できる。さらに、「此の身」の内に「木の実」つまり、胎児が宿っている、という二つの意味で解釈すると、一首目「知るや～ありとは」は肯定的に、二首目「楽園の～身に」は否定的に歌われているが、その両者への想いの葛藤が光子の心と「お腹」に渦巻くものとしてこの歌に表れているので

はないだろうか。

この歌の真意について、園子が尋ねたところ、光子は「綿貫みたいなもん相手にしたかて『、、、、、、、』とは云われん、ゞ、、、綿貫みたいにさしてしもてこそ、、、、、や」と言っているが、そのあとすぐに園子が「けどそないなこと何処まで本気で云うてなさつたのんか」と光子の真意を疑っているように、「綿貫みたいな～」につづく光子が語った歌の意味や理由それ自体が疑わしいのである。なぜなら、「木の実」の本当の意味を光子は園子に教えることが出来ないからである。『卍』という作品通してほとんどすべての文章が園子の語りであるからこそ、園子の視点からしか物語が読者には見えてこないからこそ、園子が「疑っていること」それ自体が園子の語りの外部をわずかに明るくさせる、光子の思惑、つまり「お腹の中」を知るための曖昧模糊なヒントである。そう考えると、園子が疑わしいと思っていることそれ自体が重要である。「綿貫みたいな～」以下に続く理由はおそらく光子の虚栄も混じったもので、真意ではないだろうと考えられる。何かを隠蔽するために、虚栄を張ったのではないかと考えれば、その光子の隠したかったものというのが胎児であると考えることも可能である。

光子の妊娠は柿内と園子との三角関係が崩れるだけでなく、園子の「パッション」の敗北を意味する。そうなったとき、園子は自らの敗北から光子の元を去ることになるだろう。だからこそ、妊娠することは光子にとってあってはならないことなのである。そして、「何故光子は死を選んだのか」、それは光子が妊娠することによって、すべてを、園子を、失うことを恐れたから、と言えるのである。

＊

光子の心情をその心中の間際の行動や歌から考えると、妊娠というもの可能性がより明確に見えてきた。結論として、光子が妊娠しているという確固たる証拠を見つけることは叶わなかったが、語り手の園子では語ることが出来ない、光子の「お腹の中」の闇にわずかな光を当てることが出来た。

『卍』のテクストの複層性によって、作品は可能性を多く孕んでいる。解明されない「腹の中」の闇こそが、『卍』の奥深さを生んでいると、筆者は思う。

＊底本には谷崎潤一郎『谷崎潤一郎全集　第十三巻』(中央公論社、平成二七年八月七日初版)を使用し、引用の際には、先に初出・初刊・現行として版を示し、作品内の章立てを末尾に記した。漢字は原則として新字体に直した。

註1　千葉俊二「解説　甘き楽園の木の実」(谷崎潤一郎『卍』中央公論中公文庫　平成十八年十月二十五日)

2　谷崎潤一郎「『卍』に就いて」(『谷崎潤一郎全集　第二十二巻』中央公論社　昭和四十九年七月普及版)

3　山口政幸「『卍』論―昭和六年の削除を中心に―」(『昭和学院短期大学紀要』平成五年三月)

4　「信雄」という名前は、「光子」という姉と「信一」という弟が出てくる『少年』という作品を連想させる。「光子」は「信一」を含む少年三人

に物語冒頭では折檻されており、物語終盤に向かって、その人間関係が逆転し、「光子」が少年三人の女王に君臨するようになる。名前を見てみると、確かに似ている。しかし、双方の作品の四人の登場人物や物語の構造を見てみると、あまり関連はないようである。

5　註3論文

6　永栄啓伸「卍試論―共演された心中―」（『谷崎潤一郎論　伏流する物語』双文社　一九九二年）

参考文献

真銅正宏「産児調節・避妊堕胎：谷崎潤一郎「卍」における隠された触感」（『文化学年報』六十三号　同志社大学文化学会　平成二十六年三月）
塚田高文「三つの『卍』―発禁・検閲を中心にして―」（『同志社国文学』六十九号　平成二〇年十二月）

（おおたに・くによ　平成二十五年博士前期課程修了）